

# 世界の英語・日本人の英語（後）

後 藤 いく子（社会言語学）

## Ⅲ 日本人の英語

英語の多様性を積極的に認めようという見方が盛んになっている中で、本稿の第二のテーマ、すなわち私達日本人は「国際英語」の一変種としての〈日本人の英語〉をどのようなものに作り上げていかなければならないのか、また意志疎通と自己表現の道具として、私達は何を学習すればよいのか、について論を進めていきたい。これらの間に答える前に、日本人にとっての英語とはどのようなものであったのかを振り返ってみよう。

### 1. 日本人の英語に対する態度 ー受信型・書きことば中心ー

日本で英語が本格的に学習されるようになったのは19世紀に明治政府が「脱亜入欧」をスローガンに「富国強兵」「文明開化」を目指し、英米を中心とする西洋にその範を仰いだことに始まる。当時の先進西洋諸国から新しい科学技術・社会制度等を広く学ぶための手段として英語が選ばれたのは、当時の大英帝国が経済的にも軍事的にも世界の大国であったことによる。

こうして西洋をモデルに、英語・英学を知的情報源として積極的に取り入れることによって日本は近代化を押し進めたのであるが、その摂取の仕方には大きく分けて二つの特徴があった。その一つは英語が文献・書物を通して、すなわち人間抜きで〈書きことば〉を中心に取り入れられたという点である。この姿勢はその後の英語教育においても、基本的には英語を通して英米文化を学ぼうという受信型が一般的だったことからもうかがえる。

二つ目は、西洋文化を移入するに際して自国の発展に良かれと判断したもの、自分達日本人に役に立つと思われるものだけを選択して取り入れたという点である。西洋諸国からの征服・植民地化を経る場合と違って、望ましいものだけを取り入れたのであるから英語も英語圏からのモノも憧れや美化を伴って肯定的に意識されるようになったのは当然の結果と言えよう。いずれにしても、日本人にとっての英語とは西洋の文化文明を摂取するためであり、人間同士の直接接触を欠いた一方通行の受動的なものであったため、外国人とのコミュニケーションの道具としての認識は極めて薄いものだったといえる。

イギリスによる植民地化を経たインドやシンガポールはこの点で大いに異なっている。これらの国において英語は〈書きことば〉であっただけでなく、支配者であるイギリス人との意志疎通をはかるために、嫌応なく使わざるを得ない〈話しことば〉でもあった。また独立後は多民族・多言語をかかえる国内の事情から、英語は各民族間の共通語・国内語として機能していたことは前述した通りである。自国内の教育機関を初め政治・経済に至るまで、社会生活を営む上で自分達の言語ではなく外国語である英語を使って処理しなければならないという、いわば負の遺産のためにこれらの国では、はからずも英語が国内だけでなく国外でも通用する言語として発達したのは歴史のパラドックスとでもいえようか。

言語的には一見不幸な状況に見えたインドやシンガポールが国際的コミュニケーションの場面において有利に転じることになったのとは逆に、日本では日本人同士で日常生活上の習慣・身の回りの事物現象・自分の気持ちを英語で表現する必要性に迫られることがなかったため、〈話しことば〉としての英語は消化吸収されてこなかった。国内の言語環境に恵まれていた日本人が、今かえって国際対応の場面でことばの障害に遭遇することになったというのもまた歴史のパラドックスの一面といえよう。

英語及び西洋文化に対する日本人の態度は第二次世界大戦後になっても変化することはなかった。大戦後、たまたま英語国だったアメリカが世界の経済大国となるのに伴い、今度はアメリカをモデルにアメリカ人の文化・思想等を幅広く取り入れることになったからである。終戦後、学校教育の中に英語学習が導入されるようになったが、その目指すものは依然として進んだ英米の文化を英語を通して理解し、自らの教養を高めようという基本姿勢に変化はなかった。

明治期から戦前までは〈イギリス英語〉、戦後は〈アメリカ英語〉と変化はしても、日本人にとっての英語は先進国である英米から後発の日本へ思想・文化・科学技術等を取り入れるための受信型であり、日本のことを説明したり、自分の考えを英米人や世界のさまざまな地域の人に伝えるための発信型ではなかったのである。

## 2. コミュニケーションの道具としての英語 — 英米人の英語からの離脱 —

日常生活・教育等一切が日本語で間に合うという国内の言語状況のもとで、日本人にとって英語教育が近代化の手段であり、間接的・受信型にとどまっていたとしても不都合がなかった時代は過ぎ去った。国際社会構造が急速に変化し、異文化交流が盛んになり始めた1970年代頃から日本も国際社会の一員として欧米やアジア等の国々を相手に直接コミュニケーションをする必要が生じてきた。それに伴い今度は発信型の道具として、英語の重要性が認識されるようになった。日本語が世界に普及していない現在、私達日本人が国際社会で生きていくためには自然言語であり<sup>(1)</sup>、事実上〈国際語〉として今世界中で広く使われている英語に頼らざるを得ないことはもはや疑う余地がない。その際、実際問題として、個人的に好きか嫌いか、良いか悪いかの価値評価とは別に、私達が目指すべき英語とは英米人のそれではなく「国際英語」であることは前述した通りである。

従来、日本の英語教育界において戦前は〈イギリス英語〉、戦後は〈アメリカ英語〉のみが唯一の規範であると信じられてきた。だからこれらの英語を母語とする人々(ネイティブ)の英語をモデルに「日本人離れた」「英米人と間違われるような」英語を習得することが究極の努力目標に掲げられたりもした。その結果、ネイティブのように英語を使えないことで劣等感を持ったり、また一方でその裏返しに英語を母語としない人(ノンネイティブ)の使う英語を「習得途上の英語」であるとか「教養のない英語」であるという否定的見方を生じさせることにもつながってきた。

しかし、英語を使うからといって、日本文化を身につけた日本人が英米人のようになる必要は全くなく、不可能であるといえる。たとえ言語的・文化的に英米人に近づけたにしても、せいぜい小型の亜流でしかない。

私達日本人が英語を学ぶ本来の目的は外国人とのおつき合いのためである。英語が使われる3つの場面を具体的に見てみよう。

- (1) さまざまな国のネイティブ同士のコミュニケーション。私達ノンネイティブには関わりのない場合。
- (2) ネイティブとノンネイティブとのコミュニケーション。例えばイギリス人と日本人、アメリカ人と日本人など。

カ人と韓国人のような間柄で行われる場合。今日まで大多数の日本人が英語を使う場面として想定していたものであり、そのために手本は〈イギリス英語〉か〈アメリカ英語〉が当然のこととして求められていた。

- (3) さまざまな国のノンネイティブ同士のコミュニケーション。例えば、日本人とインドネシア人、韓国人とアラビア人等の間柄で英語が使われる場合。私達日本人が国際的交渉・交流のために遭遇する確率が最も高いものであり、非母語話者数の多さからも、今後一層重要性を増すであろう場合である。

これらの場面からも明らかなように、私達日本人が英語を使ってコミュニケーションをとる相手は必ずしも英米人とは限らないということ、そして「国際英語」の特徴が最も発揮されるのがこの(3)の場合であるということをごここでもう一度しっかり認識すべきである。そうすれば、例えば「タイ人とフィリピン人がアセアン会議で英語を使って話しをする時に〈アメリカ英語〉を介在させてその発音をまねる必要もないし、日本人がマレーシアの人とビジネスをするのにイギリス風生活文化を身につける努力をする必要もない」(Smith 1983: 7) ののである。クリスタルもネイティブのような発音が要求される場合はただ一つ、「スパイ養成」の時のみであると指摘している<sup>(2)</sup>。

私達日本人はそろそろ従来のネイティブ偏重の信仰から脱皮し、「国際英語」の一変種であり、日本人としてのアイデンティティーを維持した〈日本人の英語〉を作り上げていく時期にきているといえよう。その際、「習得しそこねた」結果としての日本式英語という認識ではなく、国際的に無理なく通じる英語であれば日本人流の英語で良しとする態度で臨むべきである。

### 3. 日本人の国際英語

〈インド英語〉が母体である〈イギリス英語〉から離れ、一変種として市民権を獲得するのに200年以上もの時を要したことを考えると、〈日本人の英語〉が世界で確固とした特徴を兼ね備えたものとして確立され認められるのはまだまだ先のことであろう。

ここで「国際英語」なるものがどのような性格のものであるかを改めて確認しておきたい。まず、「国際英語」とは、「英米人の使う〈アメリカ英語〉や〈イギリス英語〉がそっくりそのまま昇格して世界のさまざまな地域で国際的交流のために使われるようになったこと」を意味しているのではないということをしつかり押さえておく必要がある。「国際英語」とは、ある定まった具体的性質をもった英語の一変種であるというより、むしろ態度・理念・考え方・現象といったほうが適当であろう。

橋内によると、その促え方に4つあるという(橋内 1989)。

- (1) 「国際英語」は、英米文化的色彩をなくしたものであり、英米人の母語としての「民族英語」的慣用句や比喩表現を除いたもの。
- (2) 「国際英語」とは、今日世界各地で使われているさまざまな英語の最大公約数であり、特定の国や民族の英語を指すのではないが、その具体的「最大公約数」は確定していない。
- (3) 世界各地で国際通用語として英語変種が実際に使われる場合、それらは「国際英語」の役割を果たしていると捉え、ノンネイティブの英語に国際性を認めようとする態度を指す。
- (4) 「国際英語」は将来国際補助語として作られるものであって、現実には存在していない。

つまり、『国際英語』とは国際コミュニケーションの手段として用いられる場合の英語を意味し、そのような状況における英語は「母語話者あるいはアングロ・アメリカンの言語的・文化的枠組みを

越えた存在」(日野 2003: 5) とならざるを得ず、私達日本人の英語も当然この範疇に入る。

それでは、日本人がこの「国際英語」をコミュニケーションの道具として実際に使いこなすには何を学習すればいいのだろうか。ここではその言語面と文化面に關わる基本的な点について述べていく。

## A 言語面 — 説明するための道具として共有するもの —

英語が母語話者にも非母語話者にも理解され通用するためには発音だけでなく表現・文法・語彙・談話規則・論旨展開の形式等さまざまな要素が關係するが、ここでは発音を中心に、慣用表現・文法に關して国際的通用度の視点から大ざっぱではあるが、学習すべき点を検討する。

### 1 発音

「国際英語」といってもしよせんは英語であり、日本語とは異なる音体系ををもっている。英語には日本語には存在しない子音や、11もの別個の母音があるため<sup>(3)</sup>、それらの発音を身につけるには意識的な努力が必要である。以下にあげたものは、そのうちでも日本の学習者には伝統的にむずかしいとされている子音と母音(6は /r/ も含んでいる)、及びそれらを含む最小対語(ミニマルペア)である。

#### a. 子音

- 1 /v/-/b/ : very-berry, vest-best, vote-boat, van-ban
- 2 /θ/-/s/ : thick-sick, think-sink, faith-face, worth-worse
- 3 /l/-/r/ : long-wrong, light-right, late-rate, play-pray

#### b. 母音

- 4 /æ/-/ʌ/ : fan-fun, mad-mud, bat-but, ran-run
- 5 /ou/-/ɔ:/ : coat-caught, bowl-ball, hole-hall
- 6 /əʀ/-/ɑ:/ : fur-far, heard-hard, hurt-heart, stir-star

英語ではこれらの音素は意味の違いをもたらす別個の音素であるため、発音の仕方によっては通じなかったり誤解される場合もあり得る。コミュニケーションに支障をきたす可能性のあるこれらの音素の習得は実用的にも望ましい。特に /l/ と /r/ の発音に關しては、習得に時間と努力 (Cost) を費やしても、それによって得るプラス面 (Benefit) を考えると充分バランスが取れると思われる。Hung によると、この二つの音素のミニマルペアは非常に多く、そのためこれらの音素にかかる役割負荷量 (Functional Load) が高いという (Hung 2002)。例えば、/ʃ/ と /ʒ/ のミニマルペアは Confucion と confusion を含む5対であるのに対し、/l/ と /r/ の場合は589対と圧倒的な数であることから、充分習得に値するといえよう。

上記のリストにはあげられていないが、日本人にとって苦手とされるもう一つの子音に /ð/ がある。この子音を含む語 (例えば、the, this, that, they, them, then, there, though, etc.) は非常に頻繁に使われるものではあるが、一部の「機能語」に集中している。上記子音リストの中の2 (thick-sick 等) のミニマルペアのように「内容語」が多く含まれている場合と違い、この /ð/ の発音に關しては、日本人の自然な発音をベースにしても他の語との混同が起ることは稀であろうし、理解度に支障をきたす可能性もないと思われる。インド人やシンガポール人はこの /ð/ 音を /d/ で発音しているが、コミュニケーションに大きな支障がないのはそのためであろう。

ノンネイティブの発音の国際通用度に關して、ラリー・スミス等は非常に興味深い研究結果を発表している (Smith and Rafiqzad 1979)。それはアジア諸国の教養ある人々とアメリカ人の英語

を、互いにどの程度理解し合えるかを調べた実証的研究であるが、それによると日本人の英語は75%という高い確率で、インドを初め11ヶ国の人々が聞き取れるという。一方、アメリカ人の英語は55%しか通じなかったのである。この結果は次の2つの点で示唆に富んでいる。その一つは、ネイティブの発音の方がノンネイティブの発音よりわかり易いという従来の考え方をくつがえした点である。また二つ目は、ノンネイティブとの国際交流が増えている現在、発音学習の基準をネイティブに近いかどうかではなく、通じるか通じないかに置くことが重要であることを示している。

個々の発音の次にくるイントネーション・リズム・スピードの点に関しては、無理をせず意志疎通に支障のない範囲で、日本人のナマリやクセがあつて当たり前とする態度で臨むことが大切であろう。

最後に、何より大切なことはHungも強調しているように (Hung 2002)、ネイティブ、ノンネイティブを問わず、はっきりと声を出して発音すること (Good Articulation) が基本であり、国際的通用度を決定づけるものであることを忘れてはならない。

## 2 慣用表現

「国際英語」を目指す私達には、英米固有の文化や価値観に基づいた慣用表現は、その意味内容を知っている必要はあつても、自分から使う必然性はないだろう。例えば、

- 1 It's Greek to me. (私にはさっぱりわかりません／まるでちんぷんかんぷんです)
- 2 I'll keep my fingers crossed. (成功／幸運を祈っています)

等、私達にはなじみのない由来をもつこれらの比喩的言い回しは、それぞれに対応する簡明な表現である

- 1 I don't understand it at all.
- 2 Good luck!

で充分であり、そのほうがノンネイティブを相手にコミュニケーションをする場合、はるかに国際通用度は高いと思われる。また、自分から使う必要がないにしても、聞き手としてこのような慣用表現を耳にし、意味の予測がつかない場合は説明を求めればよいであろう。わからなければ問い直す、通じなければ言い替える等の努力を積み重ねることによって英語の運用度が増していくことは間違いない。

また、「国際英語」の観点から、日本人としての自己表現を英語に盛り込むことも可能であろう。例えば、過去に遡ってお礼をいう習慣がない英米人がわざわざ言語化しない表現に「先日はどうもお世話になりました」があるが、日本人の言語習慣や価値観からどうしても表現したい場合には“Thank you for your kind help the other day.”等と日本式に表現することも、英語の多様性や土着化を認める「国際英語」の立場から歓迎すべきなのではないだろうか。日本的表現である“I can do it before breakfast.”(そんなことは朝飯前)や、“My son still chews my leg.”(息子はまだ親のすねをかじっている)等は今や英語に受け入れられているという(本名 1999: 135-136)。日本発のこのような英語表現も国際コミュニケーションの中で用いられ、理解され受け入れられていくうちに、いつか英語の一部になるかもしれない。

## 3 文法

英語を用いて意志疎通をするためには、それなりの語彙はもちろんのこと、それを組み合わせるルール(文法)が必要なことはいうまでもない。国際的に通用する英語であるためには、基本的に従来の英米語の文法を踏襲することになるだろう。

しかし、必ずしもネイティブの用法を採用する必要のない分野に一部の動詞の用法がある。例え

ば、ネイティブが頻繁に用いる句動詞である“put off”（延期する）や“get by”（どうにかやっていく）等は受信のレベルで知っている必要はあっても、自分から敢えて使う必要はないだろう。“put”や“get”のような動詞は、さまざまな前置詞等とともに3語以上の句動詞も形成するため、意味の上で混乱を招く恐れがある。従って、ノンネイティブとしてはこれらの“put off”や“get by”を用いるよりは、むしろ動詞とその意味がほぼ一対一の対応をする“postpone”や“survive”を用いる方が国際通用度の観点からも適当であろう。

英語は発音だけでなく、構造的にもいろいろな点で日本語とは大きく異なる系統の言語である。そのため、英米語の文法を基本に学習しても、その結果として冠詞や名詞の単数・複数形の用法、動詞や時制の使い方等、ネイティブのものとは異なる場合が多々あると思われる。しかしこれらの〈日本人の英語〉に見られる特徴は、「国際英語」の変種としてすでに認められている〈インド英語〉や〈シンガポール英語〉と共通する点が少なくない。

興味深いことに、日本人学習者で例えば、“I English study.”（私は英語を勉強する）とか“I Tokyo-to go.”（私は東京へ行く）のような、日本語の語順をそのまま英語に置き換えたような英文を作る人はほとんどいないという。その理由について本名は、言語学習というものが無原則で行われるものではなく、頭脳の中に生得的に組み込まれた言語習得装置のようなものによって「まるで見えざる手」のように言語学習を導くのだと説いている（本名 1999）。また本名は、ノンネイティブの英語に類似性と多様性が見られるのは、ノンネイティブが英米人英語の「核」となる部分、すなわち英語の中の人間言語に普遍的な側面、を採用しながら「外周」の部分では自分達の社会状況に合ったものを取捨選択しているからだと指摘している（本名 1990）。

彼の考え方に従うと、日本人にとっても「核」の部分で英語らしさがあり、共通の語彙と基本的文法を用いた英語であれば、国際コミュニケーションの場面で日本流に英語を使っても構わないということである。この「核」の部分とは、前述した橋内の「国際英語」論の中で「最大公約数」に当てはまる部分でもある。この「最大公約数」的「核」をもつ英語を日本流に使う中で、通じない場合には言い直したり、時々“Do you understand me?”等と確認しながら、「外周」の部分で日本人的であり、また同時に国際有用度の高い英語に進歩させていくことが今求められている。

日本人はほぼ全員中学と高校での6年間、あるいは更に大学の2年間を加えると合計8年間英語を学習しており、自分達が自覚している以上に一般的な文法の基礎力を持っている。だから、ネイティブ信仰の完璧主義に囚われず、この英語を基にして、初めはたどたどしくても気後れすることなく、まず使ってみることが大切なのではないだろうか。

受信の次元では、アジアを初め世界各地のさまざまな英語を聞き取る能力を身につけて、発信の次元では、国際的に通用する英語を駆使して自己を主張し、相手に説明・説得する能力を育むことが望まれている。

## B 文化面 — 説明の前提となるもの —

言語的に英語が駆使できたとしても、国際コミュニケーションにおいて障害となり得るものに文化的なものがある。この場合の文化とは、例えば日本文化で言えば、「お辞儀をする」「畳に正座する」「箸を使って食べる」等の目に見える形のもを指すのではなく、目に見えないものであり、私達が無意識に当然と思っている部分のことを指す。例えば、日本人は相手の気持ちを「察する」ことを良しとし、相手もわかっていると思う事はあえて口にださない方を好む傾向がある。これは日本人が農耕定住型単一民族であることから、集団の成員が自分と同じ了解事項を共有していることを前提に成り立っている。しかし、文化背景の異なる人を相手にする国際コミュニケーションにおいては、このような前提事項が必ずしも共有されている訳ではないことを念頭におくことが肝要であろう。

例えば、英米人は相手に飲物を勧める時、何が飲みたいのか、熱い方がいいのか、冷たい方がいい

のか、砂糖は入れるのか、クリームは入れるのか等、私達にはうっとうしいと思える位に質問をする。日本的遠慮から「結構です」と答えれば、それきり何も出てこないことになる。このような場合日本人なら相手の希望を「察して」その場の状況から適宜対処することを暗黙のうちに良しとするとところだが、英米人は無意識の前提として、選択肢を多く与えることによって相手の好みを尊重していることを示そうとするのである。

また、対人意識の表れ方に相手の名前の呼び方があるが、アメリカ人は友好的 (Friendly) で、形式ばらない (informal) ことを良しとし、相手が目上の人であっても初対面時からファーストネームで呼びあうことが多い。それは相手との関係が対等であることを建て前とする価値観が背後にあると思われるが、コミュニケーションの相手をこのようなアメリカ人だけでなく、世界的視野でとらえるならば、目上の人に対してのこのような呼び方が失礼になる文化も多いことを知っておくべきであろう。

自分の文化を基準に相手の言動を解釈すれば、食い違いが生じることは避けられない。しかし、自分と違う文化の人に接し、このような食い違いや違和感を感じる事によって、初めて日本人である自分の常識が必ずしも相手の常識ではないということに気付かされるのである。そのような時、日本人は従来相手の文化規範に合わせようとしてきたように思われるが、これからはこちら側の感じ方・考え方を相手に順序正しく説明する姿勢が必要であろう。また相手側からも説明を求め、理解するよう努力しなければならない。こうして自文化説明・他文化理解に向けて相互に寛容な態度で歩み寄る過程が異文化コミュニケーションなのである。

英語が話せるようになりたいと望みながらも、日本人がその運用能力を発揮することを邪魔しているものがあるとして、末延はその要因について次のように指摘している。すなわち、「日本人は生来外国語を話すことを恥ずかしがる傾向がある・・・それは主に間違いを恐れることによる。間違いを恐れるから話さない。そして話さないから、たまに話すと間違ふ。だからよけいに口が堅くなる。外国語、中でも西洋の言葉である英語に関しては異常なほどに潔癖な完全主義的な対応の仕方をする」と述べ、それを「西洋崇拜主義の名残でもあろうか」と分析している (末延 1990: 265)。完全に話せるようにならなければ話さないという態度は、「泳げるようになるまで泳がない」(本名 1999: 131) と同じ位本末転倒でばかばかしいのではないだろうか。

#### IV おわりに

本稿では経済のグローバル化にともない英語が国際語として使われるようになったことの現在の意味と役割について、前半では、その歴史的背景や世界のさまざまな地域で用いられている英語の分布を概観した。更に、〈インド英語〉〈シンガポール英語〉等、多様な「国際英語」の具体像を描くことによって、英語がもはや英米人等の母語話者の占有物ではないこと、むしろ英語を使用するすべての人・民族のものであることを示してきた。

後半では、私達日本人もこのような新しい英語観に立脚し、従来の英米語偏重から脱却し「国際英語」を目指すべきであること、そして国際コミュニケーションの道具としてネイティブ・ノンネイティブを問わず誰にでも通用する〈日本人の英語〉を作り上げる必要があることを強調した。また、そのための学習上の言語的・文化的留意点についてもいくつかの提案をした。

ブリテン島に始まる〈イギリス英語〉はその1500年の歴史の中で大きな変化を遂げてきた。〈イギリス英語〉から分岐した〈アメリカ英語〉も、現在のところはネイティブの大多数がアングロ・サクソン系白人であるが、2050年迄には移民の流入により全人口の半数以上が非白人になるだろうと予測されている (Balsamo and 廣田 2003)。特にカリフォルニア州・ハワイ州・テキサス州にお

いては、ネイティブよりノンネイティブの数が上回る日も間もないという (Yano 2001)。このような時代の流れの中で〈アメリカ英語〉も変化を余儀なくされるであろう。そしてまた一方では〈インド英語〉〈シンガポール英語〉を初めとするさまざまな「国際英語」が、それぞれの地域の言語文化を反映した特色ある変種として、今後も発展していくことだろう。

こうして英語の多様化が進めば、究極的にはラテン語から派生した諸言語や中国語の方言のように相互理解が不可能な変種に枝分かれするのではないかという危惧も可能性としては考えられよう。しかし、実際は分岐化に向かうよりは同質化の方向に向かっていると思われる。というのは、国際社会の関わりがより緊密になり、人々の接触もより頻繁になっている現代において、相互理解の要求から変種間の極端な地域差は一種の自動制御により排除され、お互いの共通点を見いだしていこうとするからである (本名 1990, 1999, 2003、吉川 2002)。

日本でも、さまざまな分野で国際化が進みつつある21世紀において、英語使用の機会は必ず増加するであろう。つい最近まで日本人が英語を使って日本のこと、自分の考えを外国人に伝える必要性はほとんどなかったが、これからは相手の文化規範に自分を合わせようとするのではなく、英語を駆使して自分の文化・価値観・習慣等を合理的に説明し、相手を説得できる発信型英語の能力が求められる。その際の英語とは、英米語を学習し損ねた結果としての〈日本人の英語〉ではなく、日本人としてのアイデンティティーを保持した「国際英語」の一変種としての〈日本人の英語〉である。日本人同士がお互いの英語のあら探しをしたり、発音のうまいへたを美意識の観点から感覚的に評価し合うことは〈日本人の英語〉発展の阻害要因となり得る。私達日本人にとって、英語の必要充分条件は国際コミュニケーションが円滑に行われるかどうかという点にかかっている。「国際英語」の共同使用者として主体的に使いこなし、〈日本人の英語〉を国際通用度の高いものに高めていかなければならない。

英語は国際ビジネス、国際交流、また文化的場面で国際語としてこれからも重要であり続けるだろう。このような場面で外国人に自己主張をするためには、言語面だけでなく、自国の文化文明に対する正しい認識をもつ必要がある。西洋に対する無用な劣等感を捨て、偏狭なナショナリズムに陥ることなく、日本人としての自信をもつことが重要であることはいうまでもない。

## 注

- (1) 誰の母語話者でもない点で言語的に公平に思われる 에스ぺ란토 語について、吉川 (2002) はその国際共通語としての可能性について次のように述べている。「確かに言語的公平性はあると言えるが、現実の問題として、エスぺ란토 語の現在の言語人口が800万人に過ぎないこと、人口言語の普及に必要な人的、経済的補填の必要性などを考慮に入れると、実現はほとんど不可能に近いと考えざるをえない。」(吉川「英語のグローバル化」『立命館言語文化研究』139頁)
- (2) David Crystal "Cloning the Ideal Foreign Language User" 2003年9月4日～6日に仙台、東北学院大学において開催された「日本英語教育学会 (JACET)」での特別招待講演 (9月5日)。
- (3) 母音の分類及び数は音声学者により多少異なる場合があるが、ここでは松井千枝著『英語音声学』改訂版の母音表を採用した。



参考文献

- 河原俊昭 編著 (2002). 『世界の言語政策』 くろしお出版
- 末延岑生 (1990). 「ニホン英語」 『アジアの英語』 くろしお出版
- 鈴木孝夫 (1985). 『武器としてのことば』 新潮選書
- 鈴木孝夫 (1999). 『日本人はなぜ英語ができないか』 岩波新書
- 田辺洋二 (2003). 『これからの学校英語』 早稲田大学出版部
- 橋内 武 (1989). 「英米語・新英語・国際英語」 『現代英語教育』 12月号
- 日野信行 (1989). 「日本式英語の可能性」 『現代英語教育』 12月号
- 日野信行 (2003). 『『国際英語』 研究の体系化に向けてー日本の英語教育の視点から』 『アジア英語研究』 第5号、日本「アジア英語」学会
- 本名信行 編 (1990). 『アジアの英語』 くろしお出版
- 本名信行 (1999). 『アジアをつなぐ英語』 アルク新書
- 本名信行 編著 (2002). 『事典 アジアの最新英語事情』 大修館書店
- 松井千枝 (1996). 『英語音声学』 改訂版 朝日出版社
- 吉川 寛 (2002). 「英語のグローバル化」 『立命館言語文化研究』
- プログレッシブ英和中辞典 第4版 (2003). 小学館
- Balsamo, William M.・廣田典子 (2003). *New Issues for a Changing World*. Kinseido.
- Hung, Tony T. N. (2002). “English as a Global Language and the Issue of International Intelligibility.” *Asian Englishes*, Vol. 5, No. 1.
- Smith, Larry E. (1983) “English as an International Language – No Room for Linguistic Chauvinism” *Readings in English as an International Language*. Pergamon Press.
- Smith, Larry E. and Rafiqzad, Khalilullah (1983). “English for Cross-Cultural Communication: The Question of Intelligibility.” *Readings in English as an International Language*. Pergamon Press.
- Yano, Yasutaka (2001). “World Englishes in 2000 and beyond.” *World Englishes*. Vol. 20, No. 2, pp. 119-131.